HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	観光資源としての動物
Author(s)	平, 侑子
Citation	CATS 叢書, 11, 345-350
Issue Date	2017-03-07
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/66657
Type	departmental bulletin paper
File Information	CATS11_45.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

観光資源としての動物

平　侑子
北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院 博士後期課程

1. 動物を見に行く

オーストラリアにコアラを抱きに行く，中国四川省に行きパンダの飼育体験をする，インドネシアのボルネオ島にオランウータンを見に行く等，動物を見に行くのは観光体験として珍しいことではない。このような世界的に有名な動物の生息地だけではなく，我々の身近な環境においても，動物園や水族館，猫カフェやフクロウカフェ，競馬場など，動物を見に行く場所は多く存在している。

観光の定義は未だ一つに定められてはいないが，加太は観光学者らが示す概念を整理し，「近代市民社会の定住者が，一時的に離郷し，有償を前提にして気軽に楽しむために，他郷の風物を観に行き短期間滞在をする現象に関わることどもの総体」（加太 2008）と再定義を試みている。宿泊を伴わずとも，家から出かけて動物を見に行くことは，気軽な観光行動の一種として捉えることが可能であろう。

しかし，単に動物といっても，すべての動物が観光に利用されているわけではない。隣の家で飼っている犬や生産牧場で飼育されている豚などを観光客が見に来るとは考えにくい。観光の対象となる動物や，レクリエーションや娯楽に利用される動物にはどのような特性があるのだろうか。本稿では，人と動物の関係をめぐる研究の中で，動物がどのように分類されているのかを概観し，観光の対象として利用される動物を位置づける。

2. これまでの動物の分類方法

家畜・家禽学者の林は，動物を生物学的にではなく，人との係わり方の観点から家庭動物（Family Animal），産業動物（Farm Animal），野生動物（Wild Animal）の３つに分類した（林 2002）。家庭動物は，通常犬や猫などのペットやコンパニオン・アニマル [1)]を指す。産業動物とは，「人間が生きていくために必要なものを生産あるいは提供する過程において，主要な役割を担う動物」（花園 2013:73）であり，ニワトリやウシなどの家畜や，物資を運ぶ際に使役するウシやウマなどが例として挙げられる。

動物園学者である石田らは，日本の動物観を著すにあたって，家庭動物・産業動物・野生動物の他，展示動物というカテゴリを設けた（石田ら 2013）。石田らの著書では，展示動物とはすなわち動物園の動物のことを指しているが，たとえばフクロウカフェのフクロ

ウは，種類や性別，体長，生息地などが書かれたパネルとともに店内の定位置で飼育されているし（写真 1），競馬場のパドックを歩く競走馬に関しても，人々が馬体や歩調の観察や比較をしていると捉えれば，展示の一種といえるだろう。

写真 1 フクロウカフェにおけるフクロウの展示　（筆者撮影）

打越は，動物の研究者や実務家の役割分担，さらに環境省による飼養基準をもとに，動物は愛玩動物，野生動物，動物園動物，実験動物，畜産動物の 5 種類に分類できると主張した（打越 2016）。打越は，現代社会における動物を考察する際に「仕切られた動物観」を提示している。「仕切られた動物観」とは，動物に向けられる人々の関心と専門知が，分類ごとの領域を横断することなく完結してしまっていることを意味する。たとえば，ペットを心から愛して大切にしている飼い主が，一方で，ペットフードが過酷な環境で飼育されている畜産動物から作られているという事実を深く考えていなかったり，野生動物に関わる研究者達が，犬や猫と同様の発想で野生動物への取り扱いに意見されることに対して強い拒否感を示したりする状況を指す（打越 2016）。

たしかに，我々が動物を捉えるときに，あらゆる種類の動物を一緒くたにして考えることは少なく，感覚的にも「仕切られた動物観」を用いて動物を捉えていることは頷ける。しかし，問題はその仕切り方であろう。三者が挙げている分類を概観したところ，やはり

猫カフェの猫やサーカスの動物など，どれにも分類することができない動物がある。また，「動物園では野生動物を飼育している」といったように，捉え方によっては分類が重複する場合もある。その原因として，そもそもこれらの分類の基準が一貫していないことが考えられる。

3. 生息地による分類と用途による分類

林，石田，打越による分類には，野生動物・家庭動物・産業動物・動物園動物・愛玩動物・実験動物・畜産動物というカテゴリが登場した。そのうち，野生動物や家庭動物，動物園動物などはそれぞれ，野生にいる動物，家庭にいる動物，動物園にいる動物を表しており，動物の生息地を基準に分類されていることが伺える。一方，たとえば実験動物や畜産動物，愛玩動物は，実験に使われるための動物，畜産業のための動物，愛玩するための動物であり，動物利用の用途によって区分されている。これら分類の枠組みが混同されたままであるため，人間と動物の関係を捉える際に重複が起きたり，当てはまりにくい動物の存在が出てきたりする。

特に，三者とも「野生動物」というカテゴリを用いているが，人間と動物の関係を考察するうえで，野生動物が持つ意味合いや用途は広く複雑である。たとえば池田らは，人間による野生動物の用途として，狩りの対象にして「自給品（肉・毛皮・角など）」「商品（肉・毛皮・角・牙・胆など）」にすること，そして「観光資源（クジラ，ライオン，キリン，ゾウなど）」とすることを挙げている（池谷ら 2008）。他にもそもそも人間に利用されずに（人間との関係を構築せずに）生息している動物も当然いるだろう。

ここで，野生や家庭など生息環境別に分類されたカテゴリを一度解体して，三者が挙げた動物を，利用目的を軸に動物の分類をまとめなおすと，以下のようになるだろう。

一つめは，産業のための動物である。利用目的は単純で，前述した花園による産業動物の定義「人間が生きていくために必要なものを生産あるいは提供する過程において，主要な役割を担う動物」（花園 2013：73）に当てはまるとおり，人間が生きていくため，生活をしていくために必要とされる動物である。従来から産業動物として捉えられている肉牛や乳牛，ブタ，ニワトリなどの家畜はもとより，ペット業者にとってのペットも，繁殖させ販売することが仕事となるのであるから，この区分として捉えることができる。

二つめは，愛玩するための動物である。愛玩するための動物には，飼い主側の立場から捉えるペットなどが当てはまる。ペットやコンパニオン・アニマルに関する研究は，ヒトと動物の関係学の中でさかんに行われている。鷲巣は，コンパニオン・アニマルとは「社会において人間が感じる孤独感や分離感を充足する」存在，「ストレスを解消する」存在，「安らぎや仲間を求める気持ちを満たしてくれる」存在であると指摘しており（鷲巣 2008），これらの指摘はまさしく，人間にとってこのカテゴリに分類される動物の利用目的として考えられるだろう。

そして三つめに，観光のための動物が挙げられる。石田ら（2013）が分類した展示動物（動物園動物）はもとより，観光資源とされる野生動物（ホエールウォッチングや奈良公園の鹿など）も当てはめられる。そして，筆者がこれまでの分類方法では当てはめにくいと指摘していた，サーカスや猫カフェ，闘牛，競馬など身近な観光体験に利用される動物も，このカテゴリに分類できる。ただし，第 2 節で述べたとおり，ヒトと動物の関係学の中で「観光のための動物」という分類はこれまでなされておらず，人は何のために動物を見に行くのか，動物を見に行くことで何を得ているのかといったことは，未だ明らかにはされていない。

4.「観光のための動物」の特徴

観光のための動物は，他の動物とどのような違いがあるのだろうか。前節で分類した動物 3 種に加えて，人間と接点を持たない動物（人間に利用されていない野生動物）も含め，その性質を比較しながら考察を続けたい。

例えば，愛玩のための動物や産業のための動物は，その一生を人間が完全に支配しているといえる。ペットには，どのような名前をつけるか，何を食べさせるか，繁殖の制限や病気になった時の治療の選択なども飼い主の意思と選択に任される。産業のための動物，例えば家畜等もその生命は人間によって一元管理されているし，実験動物も人間の管理下に置かれ，実験に利用される。一方で，観光のための動物を考えると，利用者（観光する者）は，対象となる動物の生命に対する責任を負わず，その動物の生活の一部分を見るに過ぎない。人間と接点を持たない野生動物については言うまでもなく，我々人間の支配には及ばない。愛玩のための動物・産業のための動物と，観光のための動物・人間と接点を持たない野生動物は，人と動物の支配・被支配の関係性や，コントロールの可否という観点から異なっているといえる。

一方，愛玩のための動物や観光のための動物には，個体に名前がついていることが多く，人間側からのアプローチとして個体を認識しようとする見方が含まれている。動物園の動物にも，猫カフェやフクロウカフェの動物にも名前が付けられ，動物の種類としてよりも個体として理解しようとできる余地がある。しかし，家畜や野生動物には一頭一頭に名前をつけることはなく，対象に親密さを感じる余地は少ない。

これらの比較を図に表すと図 1 のようになるだろう。観光のための動物，レクリエーションや娯楽に利用される動物は，人間から見て動物への支配の度合いは低く，かつ親密さを感じられる余地がある存在であると特徴づけられる。実際，動物園の動物を見ると，来園者は開園中の動物の姿しか見られず，飼育は飼育員が行うために命の責任を負うことはない。ペットのように対象の生き方をコントロールすることはできず，動物からは野生の部分を垣間見る。一方で，完全な野生動物とは異なり，一頭一頭に名前を付けて，その個体の特徴や性格を解釈しようとするまなざしも存在する。観光のための動物に対して，人は

自分のコントロールの及ばない一面（野生）への出会いと，対象への親密さへの期待の両方を抱いているのではないか。今後も，レクリエーションに利用される動物に着目し，人間と動物との関係を野生のコントロールや親密性の観点から考察を続ける。

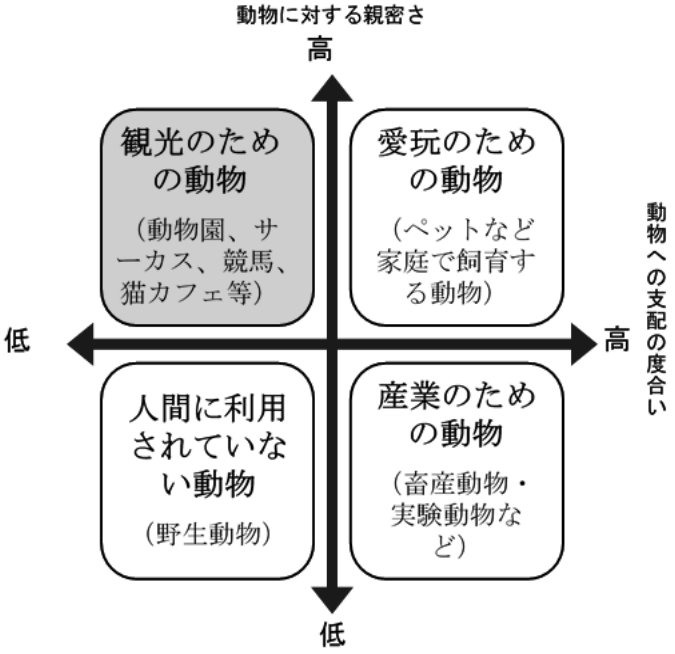

図１　利用別に見る動物の分類試案（筆者作成）

注

1）ペットとは家庭内で飼育され，人が一方的にかわいがるイメージがもたれるが，コンパニオン・アニマルは，人と人生を共に生きる伴侶や仲間という意味が含まれる（濱野2013）。

文　献

池田和信・林良博・奥野卓司
　2008　「地球の野生動物と人類」林良博・森裕司・秋篠宮文仁・池谷和信・奥野卓司編著『ヒトと動物の関係学第４巻－野生と環境－』p.6，岩波書店。
石田戢・濱野佐代子・花園誠・瀬戸口明久
　2013　『日本の動物観』東京大学出版会。
打越綾子
　2016　『日本の動物政策』ナカニシヤ出版。

加太宏邦
2008 「観光概念の再構成」『社会志林』54(4): 27-62, 法政大学社会学部学会。
花園誠
2013 「産業動物の歴史」石田戢・濱野佐代子・花園誠・瀬戸口明久『日本の動物観』pp.73-103, 東京大学出版会。
林良博・近藤誠司・高槻成紀
2002 『ヒトと動物―野生動物・家畜・ペットを考える』朔北社。
鷲巣月美
2008 「ペットロス―共に暮らした伴侶動物を失って」林良博・森裕司・秋篠宮文仁・池谷和信・奥野卓司編著『ヒトと動物の関係学第３巻―ペットと社会』pp.179-196, 岩波書店。